



小説を読んで

人間文化学部 教授 原田 明子

私の専門はアメリカ小説の研究です。18 世紀以降のアメリカ小説や、アメリカ文化と関係の深いイギリスの小説を中心に読んできました。小説というのは結局のところエンタテインメント（娯楽）ですから、優れた作品であればあるほど読むのは楽しいものです。日本語でも英語でも、良い小説は大切に読むと、ぜいたくな時間を過ごすことができます。小説を読んで楽しかった経験を、いくつか書いてみます。

1. 不思議なもので、同じ小説でも年を経て読み直すと、以前とは別の顔を見せてくれることがあります。最近、昔大好きだったピンチョン（1937～）の『V.』という小説を読み返しているのですが、40 年前と同様にワクワクしながらも、以前とは別の部分にひかれて読んでいる自分に気づきました。読み手の視点が変わると、作品の別の一面が表に出てきます。若い頃の自分に読解力が無かったただけなのかもしれませんが、好きな小説に二度出会えたようなうれしい気持ちです。
2. 年を取るにつれて、小説の読み方も変化してきました。学生時代、英語の小説を読み始めた頃は、言葉の力に引きずられるように、駆け足でストーリーを追っていた感がありますが、だんだんと、時間をかけてゆっくりと物語を楽しむようになりました。舞台となっている場所の昔の地図を時間をかけて眺めたり、当時の世界情勢を少し詳しく調べたりすると、小説の言葉が急にリアルな表情を帯びてくることがあります。
3. 一つの作品を読むことで、別の分野の本を何冊も読んでしまうこともあります。シルコー（1948～）を読んだ時には、臓器売買やアリゾナの水問題、プラントハンター、グノーシス派の研究など、普通なら手に取らないような分野の本も読むことになりました。小説は、その外のような様々なストーリーにつながっています。

ところで現在アメリカという国は、自由主義のリーダーとしてのイメージを大きく変えつつあります。「アメリカ小説の父」と言われるブラウン（1771-1810）は、独立したばかりの若いアメリカを描きました。彼の小説には、両親をインディアンに殺害されたトラウマで夢遊病になり、夜ごと荒野をさまよってインディアンと死闘を繰り広げるも、翌朝は何も覚えていないという若者や（『エドガー・ハントリー』）、独立後の混沌とした時代に、意気軒昂に農村から首都フィラデルフィアに出て来たものの、自分は新しい世界で何をして生きていこうか、もしかして悪事に加担させられているのではないかと、自分の行動は間違っていないだろうかなど色々と思悩み、明確な答えが出せないまま、未来に向かって舵を切っていく若者（『アーサー・マーヴィン』）が登場します。アメリカ合衆国を手探りで始めた人々の姿を描いたのでしょう。独立宣言から 250 年経ちますが、トランプ政権のニュースが報じられるたびに、なぜかブラウンの若者たちの痛みや迷いを思い出してしまいます。

仮図書館についてお知らせ

中央研究棟へお引越し

2025年7月～11月



空調設備工事に伴い、図書館を一時閉館いたします。

7月から11月の間は、中央研究棟2階の第1会議室に仮図書館を設置し、カウンターと学習スペースを用意いたします。

仮図書館に置ききれない図書の貸し出しはリクエスト方式となります。

事前に蔵書検索システム(OPAC)をご利用のうえ、ご希望の図書をリクエストしてください。職員が工事中の図書館より持参いたします。

また、この機会に電子図書館「ライブラリエ」・「キノデン」をご利用いただき、インターネット上での読書をお楽しみいただくのはいかがでしょうか。

大変ご不便をおかけしますが、学生の皆様の学習を少しでもサポートできるように努めてまいります。

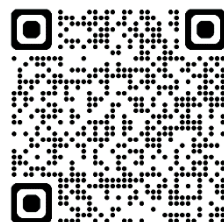
何卒、ご理解とご協力をお願いいたします。

開館カレンダー 🌸 6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

□ 9:00～18:00 □ 9:00～13:30

□ 休館日



← OPACのQRコード

仮図書館は
一般利用者の方にも
開放します。

